

『 家庭訪問 』

ほとんどの小中学校において、新学期が始まってまもなく（概ね4月下旬）、全家庭を対象に一定の期間を設けて、家庭訪問を実施しています（近年、実施しない学校も全国的にはあるようです。また、持ち上がりの学年においては実施しない学校もあります）。

家庭訪問を実施するまでには次のような流れがあります。

新学期初日に、家庭訪問実施に係るお便りを発行し、その際、訪問可能な日や時間帯の希望を調査します（訪問予定枠を提示）。かつては、「第三希望までご記入ください」で、何とか調整ができましたが、数年前から、保護者の仕事等の関係で、第三希望まで出していただいても複数の保護者の希望が重なることが増え、最近では、訪問可能なところは全て〇をつけてもらうところも多いと思います。（この状況は、学校の規模で違いはあります）

この一次調査で、訪問の日程調整が完了しますと「めでたし。めでたし」ですが、そうならないことがままあります。どうしても希望が重複した場合、最後は担任が個別に電話をかけ別の日程を提案し（お願いに近いです）調整します。以上の調整作業だけでも、かなりの時間を費やし、気苦労も多いのです。

私が、学級担任をやっていた頃は（最後は平成10年頃）、この家庭訪問の日程調整は、けっこう強気な姿勢で当たっていました。

40件近くの訪問でしたので、保護者の希望は一切取らず、こちらから原案（訪問するエリアを決め、そのエリア内で効率的に行うことを基本方針としていました）を提示し、「どうしても都合がつかない場合はご連絡ください」というやり方をとっていました。当時は、まだ、保護者が担任の都合に合わせてくれていた時代だったのだなと思っています。

今、このやり方を取りましたら、ほぼ間違いなく、今風に言うと“大炎上”に。「こちらの都合も聞かずに！」「今からだとシフトの関係で休みが取れない！」など、クレームの嵐になると想像しますので、決してお勧めはしません。

ところで、「家庭訪問」は、いつ頃から行われるようになったのか調べてみたところ、明治期末には、各地の小学校で実施されていたようです。

当時の学校も、保護者との連携の回り方として、通信簿をはじめとする連絡文書の発行、授業参観や懇話会の開催などに取り組んでいましたが、効果がなかなか上がらないことに苦慮していたようです。そこで、保護者が学校に来るのを待つのではなく、積極的に教師が家を訪問することが奨励され、結果、「甚だ有効なる方法」と、その効果が大きいことが認められています。

例えば、“児童についての情報交換だけなら父母を学校に呼び出してもできるが、双方の意思を疎通し連絡提携を密接にするためには、家庭訪問の方が「家庭の人々も打ち解け・・・（保護者にとっては、学校はアウェーみたいなものなんですね）、必要に応じて種々の人々と話を交え

ることができ・・・家庭の様子が一層明確にわかる」と、その有効性が記されています。

以来、110余年、家庭訪問は、教育活動の一環として、連綿と続けられてきました。私も、新学期早々、係から家庭訪問実施に係る提案がなされると、何の疑問もなく、粛々と取り組んでいました。1日に7、8件の訪問が多く、6件目あたりから、頭がくらくらしていました。また、訪問先にたどり着くまでに予想以上の時間がかかってしまうこともあり、「遅れてしまい大変申し訳ありません」と、謝ることも多々ありました。保護者にも、様々な予定がある中で都合をつけていただいているので、本当に申し訳なかったなと深く反省しております。それでも、「いやー、先生、ご苦労様です。大変ですね」と、広い心で受け止めていただき、温かく応じてくださいました。今振り返っても、有り難く、感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、家庭訪問のねらいは、第1に新学期の早い段階での子どもの学校や家庭での様子に係る認識を保護者と担任が共有する。第2に児童生徒の住居の位置確認。第3に保護者の雰囲気や家の中の様子の把握。以上の3点が一般的だと押さえていますし、妥当だと思っています。

そして、これらの情報は、以後の指導に資するものであることには間違いありませんが、せっかく、保護者、担任の双方が都合をつけてコミュニケーションする場なのでから、より有益な場にしたほうが良いなと考えるようになりました。30代半ばくらいからですが。

余談になりますが、家庭訪問の時期に一部同僚から、「よく話してくれる保護者は、やりやすい。あまり話さない保護者は、やりづらい」という声が聞こえてきます。その通りだと共感しつつも、「そのコミュニケーションをコーディネートするのが教師の仕事でしょ」と思うようになりました。人と話をすることに苦手意識を持っている保護者はけっこういます。話題が途切れたら、教師の方からアプローチして保護者をコミュニケーションに巻き込むのです。妙な表現かもしれませんが、「先生と話ができて良かった」と感じていただけたら、その訪問は「〇」だと思っています。そして、このようなコミュニケーションが成立しますと、担任の人間性や教育についての考え方等を保護者に理解していただくことにつながります。この効果は大きいです。

一方で、逆の状況を作り出してしまうと、厳しい言い方ですが、担任への評価は今一つになります。ひどい時は、「あの先生、何なの？」という良くない印象を持たれてしまいます。これは、教師にとっては損なことであり、以後の教育活動推進に係るリスクを負うことにつながると考えます。保護者に迎合する必要は一切ありませんが、お互いが「やったかいいがある」コミュニケーションを目指して努力や工夫をすべきだと思います。

明治期の家庭訪問においても、“教師の訪問を迷惑がる保護者もあり、教師は懇切なる態度、談話によって誤解を避けるようにし、自ら胸襟を開かねばならない。”と留意させています。

最後に、私見を述べます。かつての家庭訪問には、“家庭調査”のねらいもありましたが、現在は、児童生徒の情報の共有が主だと押さえます。であるならば、保護者が学校に来ていただいていた担任との懇談、いわゆる“個別懇談”で十分に子どもの情報の共有や保護者との一定の連携を図ることはできると押さえます。児童生徒の住居の位置確認は、夏休み中か、夏休みまでに放課後の時間帯を利用して少しずつ行うこと（校区内巡視にもなります）で支障ないと考えます。これにより、新学期早々の、教員の超多忙な状況を解消する一助になるのではと思っています。

なお、様々な状況への対応のために行う随時の家庭訪問は、とても大事な活動です。適切かつ迅速にやるべきです。